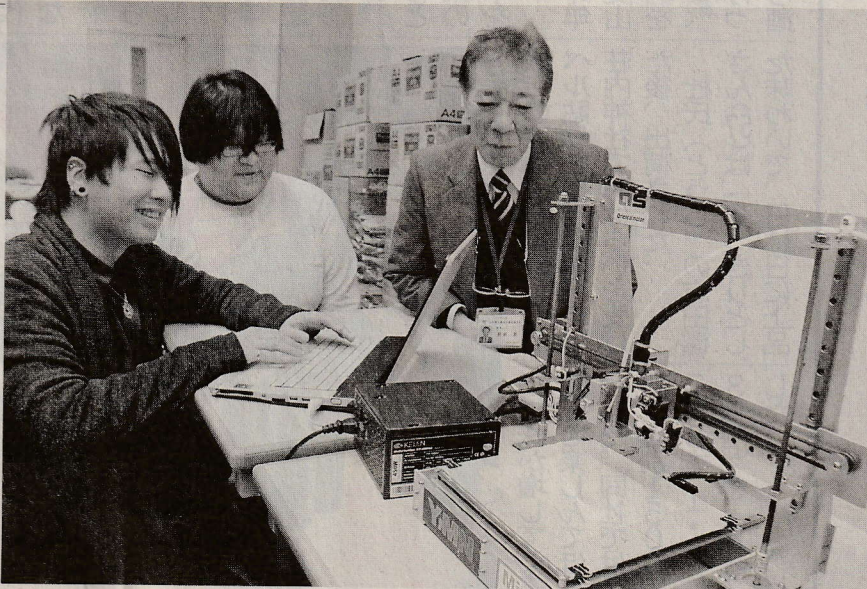


触れる地図 くっきり

YMN・霞城学園高有志 公共施設 視覚障害者向け

県内の教育・産業界の有志による「やまがたメイカーズネットワーク(YMN)」(代表・大津清興産業科学館長)と山形市の霞城学園高(井上恭一校長)の生徒有志が、3Dプリンターを使った地図作りに取り組んでいる。視覚障害者が触って分かるように、平面図に凹凸を付けるのが特徴。同市の霞城センターのフロアやトイレ内の地図から手掛け、今後は観光施設などにも広げる考えだ。



3Dプリンターを使い、触って分かる地図作りに取り組む斎藤薫さん(左)と霞城学園高の生徒たち

山形市・同校

病気により途中で視力を失った人など、視覚障害者といっても全員が点字を読めるわけではない。屋外ではスマートフォンなどの地図の音声案内が活用できるが、特に屋内の移動が不便だという。

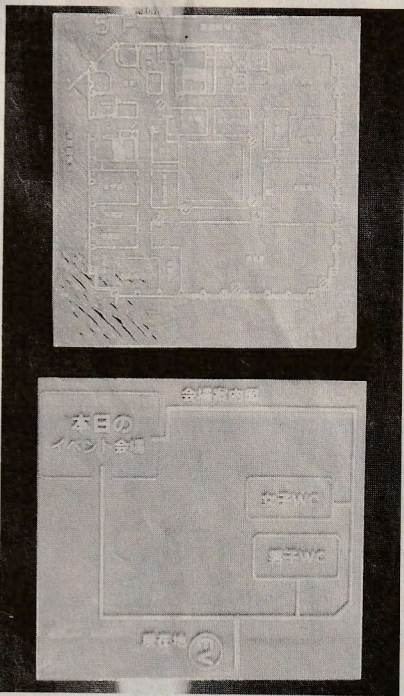
そこで始めたのが今回の地図作り。地元の障害者団体から依頼を受けたYMN事務局長で霞城学園高Ⅱ・Ⅲ部担当職員(斎藤薫さん(57))を中心に、昨年12月から本格的に作り始めた。約半年間、3Dプリンターの使い方を学んだⅢ部(夜)の生徒がボランティアで協力している。

視覚障害者とも意見を交わしている。最初は平面図にそのまま凹凸を付けた試作品を紹介。意見を聞き、盛り上がった部分の高さを変更したほか、「余計な情報はいらぬ」との声を受け、簡略化するなど改善を続けている。

切実な訴えもあった。「官公庁をはじめ、山形は視覚障害者に対する取り組みが遅れている」「怖くて外に出られない仲間もいる」「ぜひ地図を完成させてほしい」。こうした声に背中を押されながら週1回のペースで活動している。

協力する生徒の一人、3年岡崎拓さん(18)は「困っている人がいるのに、どうして誰も改善しないのか疑問に思っ

意見交換 凹凸改良し簡略化



上が当初の試作品。下が改善版。凹凸がはっきりし、簡略化されて分かりやすくなっている

た。時間はかかるが、自分ができることは手伝いたい」。同じく3年鈴木諒太さん(18)は「好きな場所に行けないのは悲しい。地図を通して、さまざまな場所に出掛けられるようになってほしい」と取り組みで知った視覚障害者の不便さに思いを寄せた。斎藤さんは「今後も改善を続けながら、より良い地図にしていきたい」と話している。